

授業科目 学校における支援体制

特別支援教育講座 花熊 暁

受講者数 10名

1. 授業の目的

学校における特別支援教育の体制作りの実際を取り扱う本授業科目（後期：2単位）は、コーディネーター専修で学ぶ現職派遣教員が院修了後に勤務校に戻ったときに、また、非現職院生の場合は教育現場に勤務したときに、自身が所属する学校・園や地域で特別支援の体制作りを行いうる実践力を身につけることを目的としている。

本授業では、コーディネーター専修のカリキュラム中、他の授業科目で得た情報、通年で実施している教育実践研究科目（学校実習）での体験、の2つをベースとし、さらに現職派遣教員の場合は、これまでの勤務経験と勤務校・勤務地域の実情を加味して、これらを総合的に取り扱う中で、「特別支援教育コーディネーターの立場に立ったとき、勤務校や地域において特別支援教育の実施体制をどう作っていくか」という課題を主体的に学べるようにしている。

そのため、本授業では、教員からの知識教授に偏りがちな講義形式を避け、〔小グループによる討議 討議内容のまとめと報告 報告内容に対する全員での討論 教員のコメントとまとめ〕という演習形式を採択している。そのねらいは、受講者各人が、特別支援教育の体制作りに関する明確な課題意識を持つこと、実習校や勤務校における自身の体験と授業での討論課題を結びつけること、特別支援教育の体制作りに関する具体的なイメージとアイデアを持つこと、である。また、受講生が大学院修了後に特別支援教育コーディネーターの役割を果たすことが期待されている点から、周囲の理解を得るための表現力とプレゼンテーション力を身につけることも目標とした。

2. 受講者について

本授業は、コーディネーター専修の院生を主たる対象としているが、特別支援学校教育専修の院生も選択履修できるようになっている。本年度の

受講者数は10名で、その内訳はコーディネーター専修6名（全員が現職教員）、特別支援学校教育専修4名（現職2、非現職1、留学生1）という構成であった。

3. 授業の内容と展開

本年度の授業では、受講者を3つのグループに分け、討論課題ごとに小グループでの討議とグループごとの発表を行った。グループ討議結果の発表にあたっては、プレゼンテーション力を高めるために、パワーポイント使用にあたって、15分の発表時間を厳守すること（15分±1分であること）、発表時間にマッチしたスライド量を考えること、一目見て言いたいことが分かるような図式化されたスライドを作成すること（文字量を少なくすること）の3つの条件を課した。

<本年度の授業における新たな工夫>

(1) 討論テーマの設定における工夫

昨年度までの授業では、教員から討論テーマを提示していたが、本年度は授業の始めに、受講生から教育実践研究科目（学校実習）における問題点や課題の報告を最初にしてもらい、受講者にとってより身近で切実な問題を討論テーマとして取り上げることで、問題意識と課題解決への意欲が高まるように工夫した。

(2) 留学生に対する配慮

本年度は、中国からの留学生1名が本授業を受講していた。日本語理解や日本の学校教育制度についての理解が十分ではない本院生に対しては、キーワードとなる用語や日本の学校教育制度について別途解説すると共に、グループ発表に際して、発表テーマに関連する中国の教育事情について報告してもらうことで、授業参加意欲と授業内容理解が高まるように工夫した。

<討論テーマ> 数字は討議・発表の時間数

(1) 学校実習における問題・課題の報告

(2) 保護者への働きかけ：学校の保護者全体に特別支援教育の意義を理解してもらうには

- (3) 保護者支援：特別支援への理解・協力が得られにくい保護者にどう対応するか
- (4) 特別支援への協力が得にくい教員とのコミュニケーションをどう図るか
- (5) 授業崩壊またはそのリスクがある学級をどう支援するか
- (6) 特別支援を可能にする学級集団づくり
- (7) 小規模校・複式学級での特別支援教育の体制作りをどう進めるか

4. 授業評価アンケートとその結果

授業終了後に、学校における特別支援教育の体制作りに関する課題が理解できたか、討論のテーマと授業内容に興味・関心が持てたか、学校現場に戻ったときに実際に役立つ授業内容だったか、授業の進め方は適切だったか、教員の解説やコメントは適切だったか、本授業のような内容・進め方の授業は特別支援教育専攻の授業科目として適切だったか、本授業に対する感想と改善が必要なところ、の7項目からなる授業評価アンケートを実施した。項目～とは5段階尺度の評定、は自由記述形式である。また、項目については、2段階尺度の評定とし、「改善が必要」とした場合には、自由記述欄に改善すべき点を述べるようにしてある。

については、全員が「よく理解できた」と回答しており、学校における特別支援教育の体制作りでいま何が課題となっているかについての理解を深めるといふ本授業の目標は達成できたと評価できる。

の討論テーマと授業内容への興味・関心については、「非常に」と答えた者が7名、「かなり」と答えた者が3名で、概ね目標が達成できたと考えられるが、取り上げたテーマによって、受講者間の興味・関心に若干の差が生じたようである。このことには、本年度の授業で、コーディネーター専修院生から学校実習で実際に感じた課題の報告をしてもらい、それをもとに討論テーマを設定したことが関係しているかもしれない。学校実習の場は、大規模校から過小規模校まで多様であるため、自分が実習に行っている学校における課題と討論課題との間にズレが生じ、そのことがテーマへの興味・関心に影響している可能性も考えられる。

の「学校現場に戻ったときに実際に役立つ授業内容だったか」については、全員が「非常に」と回答していた。本項目は、授業担当教員として最も重要視している授業目標に関するものであり、教員としては満足のいく結果であった。

の授業の進め方については、全員が「適切」と回答していたが、その一方、の自由記述欄への書き込みが最も多かった項目でもあった。受講生からの意見としては、次のようなものがあった。

- (a) 討論の時間の最初に教員から討論テーマが示されたが、できれば事前に授業スケジュールとして通知してほしい。その方が、授業時間外学習がさらに充実すると思う。
- (b) 12~1月は修士論文のまとめに忙しいため、2週に1回の報告はやや負担に感じた。10~11月は討論・報告、12~1月は講義の形で授業を進めてはどうか。
- (c) 討議と発表の形式は、プレゼンテーション力をつける上で非常に役立った。

の教員の解説とコメントについては、全員が「適切」と回答しており、教員の授業内での役割に特に問題はなかったと考えている。

の「本授業のような内容・進め方の授業は特別支援教育専攻の授業科目として適切だったか」は、と同様に、授業担当教員として最も重視している調査項目であるが、7名が「非常に」、3名が「かなり」と回答しており、授業の目標は概ね達成できたと考える。

その他、本授業の目標の1つであるプレゼンテーション力の向上については、複数の院生が上記(c)のコメントを寄せており、「修論発表会で大いに役立った」との記述もあった。また、本授業の受講生の中には、現職教員以外に非現職1名と留学生1名がいたが、非現職の院生からは「現職教員と一緒に特別支援教育の体制作りの課題を考えることができ良かった」、留学生からは「分かりやすい授業で履修して良かった」とのコメントがあり、現職教員以外の院生の授業評価に大きな問題はなかった。

5. 次年度にむけての課題

以上のように、授業評価アンケートの結果は良好で、本授業の目標は概ね達成できたと自己評価されるが、受講者からの指摘内容(a)、(b)にもあるように、討論と発表を中心とする演習型の授業内容にあっては、討論テーマの提示のしかた等になお一層の工夫が必要だと感じた。特に、受講者による討議の中に、授業外学習をどう組み込んでいくかが、次年度の課題だと言える。

また、本授業が1年制大学院の授業であることから、修士論文のまとめの時期等を考え、全てを討論・発表型の授業とするか、授業の後半に講義等も取り入れるかどうか、今後の検討が必要なおところである。